

## 令和5年度 第1回京都市国際交流・多文化共生審議会 摘録

日 時：2023（令和5）年8月2日（水）午前9時30分～

場 所：京都市国際交流会館 3階 研修室

議 題：（1）京都市国際都市ビジョンの推進及びビジョンを踏まえた本市関連事業について  
（2）今期における提言に向けた議題・審議等について

出席者：＜京都市国際交流・多文化共生審議会審議会委員＞  
大熊晋委員、庄秀輝委員、孫美幸委員、チースレロヴァー・クリスティーナ委員、  
浜田麻里委員（座長）、林建志委員、プラー・ポンキワラシン委員、前田哲央委員、  
リュウ・ウィトン委員  
＜京都市＞  
松野 総合企画局政策推進担当局長、西松 国際交流・共生推進室長、  
長谷川 同副室長、大久保 共生推進担当課長、檜山 企画調査係長、  
大野 共生推進係長、白敷 係員

次 第：（1）開会  
（2）議題  
（3）閉会

配付資料：資料1 令和5年度の主な国際交流・多文化共生推進関連事業について（議題1）  
資料2 今任期における提言に向けた議題・審議等について（議題2）

### 1 議題1

＜浜田座長＞

それでは、事務局から国際都市ビジョンの推進に係る関連事業等の説明をお願いします。

＜事務局＞

〔資料1〕に基づき説明）

※ 特段、各委員からの意見等なし。

### 2 議題2

＜浜田座長＞

では、次の議題に進ませていただく。「今期における提言に向けた議題・審議等について」である。まず、事務局から提言に向けた議題・審議等の概要についての説明をお願いします。

＜事務局＞

〔資料2〕に基づき説明）

＜浜田座長＞

ありがとうございます。前期、令和3年度と4年度の2年度にわたり、この審議会から提言を出したが、もともとは多文化施策審議会だったものが、前期からは国際化推進プランの点検と、文化共生のための審議を行う仕事と、二つの仕事をこの審議会が担うようになった。国際交流と多文化共生は、なぜか対立して捉えられることもあるが、実は非常に関連が深く、むしろ車の両

輪として進めていくのがふさわしいのではないか。まさしくこの審議会は、その両方の役割を担っているというところを生かして、どちらにもプラスになるような取組が何かできないかと考えている。今期は国際交流と多文化共生の担い手、それに加えて外国籍市民の方が積極的に社会参画できるような、テーマに関してこの審議会から何か提言ができないかという趣旨である。

事前に佐野委員からの御意見もあったが、優秀な人を囲い込むということではなく、国際交流や多文化共生の考え方が、市民全体に波及していくことが、最終的なゴールとして目指されるべきであろうということに、私も個人的に賛同している。

それでは、委員の皆様から御意見を伺いたい。それぞれのテーマについてでも良いし、もっとこういったテーマのほうが良いのではないかと等、是非積極的に御意見を出していただきたいと思うが、いかがか。

#### <チースレロヴァー委員>

国際交流と多文化共生の両方に共通する、非常に重要なテーマだと感じているが、一般市民の外国人に対する理解をサポートするようなシステムが必要だと思っている。ふとしたときに、とんでもない偏見を聞いてしまうことがある。例えば、外国人はルールを守らない等、話し手にとっては、冗談やネタのつもりで話しているようなことでも、外国人に対する一般市民の理解が、なかなか進んでいないと感ずることがあり、具体的にそういった偏見などに対処する取組を考えていく必要があるのではないか。

アイデア段階にすぎないが、市民しんぶん等の京都市が出すメディアで特集を組み、京都に住んでいる外国人が日本人と同じように暮らしながら、地域活動に参加している等、そういう意識を広げていく必要があるのではないかと思う。もちろん、ファシリテータの方が一人で大きく活動するというのも一つの案だが、やはり一般市民の理解を深めていくのが基礎的な方針になるのではないか。

#### <浜田座長>

ありがとうございます。全員が担い手になるために、まずその前提条件として、偏見とか差別をなくしていくという取組が重要だという御提言かと思う。

その他、いかがか。

#### <孫委員>

チースレロヴァー委員と似ている点もあるが、今回の案にある、多様性と包摂性を本当に実現していくことはとても大変だと感じている。今、本当に社会状況が厳しいので、中途半端な提言では許されないと考えている。先ほどチースレロヴァー委員の発言にあった偏見の内容については、この事業の中に入っていないが、私は歴史性というのがとても大事だと思っている。今年は、関東大震災から100年なので、様々な地域でその当時のことを振り返る等、そこから共生を考えていくという取組がされている。何か遠いところで起こったことではなく、歴史から学び、今のヘイトの問題も含めて、共生につなげていくことが提言としても必要ではないか。

もう1点、日本の相対的貧困率が上がっており、世界各国と比べても貧困層に入ってきている。ここ数年で格差を実感することが増えてきた。例えば、学生たちと関わっている中でも、今はア

アメリカに留学することが金銭的にもとても難しくなっている。それでも、さっとお金を出して行きますと言って行ける生徒もいれば、バイトに明け暮れる学生たちもあり、その差が大きくなってきたという実感がある。

大学だけでは難しいので、若者たちが海外に行くサポートを、地方自治体ができればと思っている。そういったきっかけが、国際交流や、多文化共生に関わる担い手につながっていくのではないか。歴史性と社会状況の厳しさの中で、どのように担い手を育てていくか、を意識したいと思っている。

#### <浜田座長>

ありがとうございます。ヘイトやネット上での発言等が社会問題になる中で、私も非常に厳しい状況だと思っている。十分な情報がない中で、簡単に何かプロパガンダのようなものを若い人たちが信じてしまい、外国人が来るのが自分たちにとってマイナスだといった考え方を、何となく持っている人たちが増えてきているということを実感している。そういった現状に、市としてどのように取り組んでいくかというのは、とても大きな問題だと思う。歴史を踏まえた取組や、具体的に海外で様々な交流ができるようにサポートしてはどうかという御提言をいただいた。

今日は第1回審議会のため、できる、できないとか、良し悪しではなく、思いついたことを色々出していただき、幅を広げていただけたらと思う。

その他、いかがか。

#### <プラー委員>

伏見青少年活動センターで開催されている日本語教室等は、若者を中心に、外国との交流を目的として参加されている方もいると思う。浜田座長がおっしゃっていたように、京都府在住の18歳以下の子どもが、1,000人増えたうち、300人程度が家族滞在ということであったが、これまで日本の教育現場で教育を受けたことがない、例えば国際結婚の女性や、家族滞在として暮らしている方々は、日本語に接する機会がやっぱり少ないんだと思う。もちろん多言語での情報発信というのは、これまでずっとやってきたもので続けていかなきゃいけないと思うのだが、日本社会に順応していけるためには、やっぱり最低限の日本語が必要だと思う。コミュニケーションを取ったり、地域コミュニティに入ったりするのにも、日本語が必要になってくるので、より学びやすい、そして継続的な機会が必要だと思う。例えば、ヨーロッパなどの移民政策がしっかりとしている国々では、外国語教育を半年あるいは1年間無料で実施しているような国もある。日本では、その移民政策がないということを前提としていること自体が問題だと思うし、予算の問題もあると思うのだが、そういうことも外国籍住民がたくさん住んでいる自治体として、京都市が先行してやっていくことによって、京都のファンが増えると思う。ファンが増えることで、京都に住みたいと思ってくれる人も増える。そうすると、担い手がそこから出てくるというふうに、つながっていくんじゃないかと思う。ただ、2年間で日本語教育を全部賄おうと思ったら、それはちょっと難しいかなと思う。でも、まずは始めないと、スタートできないなというふうに思った。

### <浜田座長>

ありがとうございます。日本語教育の学習環境を充実させる、ということはとても重要な課題だと思う。前期の提言の中でも、外国人の方が住みやすい環境をつくることで、どんどん京都に来ていただいて、そして京都のまちを元気にしていこうという発想で、色々御意見いただいた。その中の一つに、基本的な日本語学習の環境整備があるのではないかという貴重な御意見だった。その他、いかがか。

### <前田委員>

国際交流の担い手の裾野を広げていきたい、ということに質問があるのだが、最近、仕事をしている中で感じることは、かなり学生を中心に若い人たちが、英語やフランス語等、多言語でコミュニケーションをできる方がすごく増えているなということ。そういう方々に対する京都市の取組の発信というのは、どうされているのか。

### <浜田座長>

具体的に、英語教育やフランス語教育についての成果を発信しているかとか、そういうことか。もう少し詳しくお聞かせいただきたい。

### <前田委員>

国際交流の担い手ということで、例えばイベントを運営するだとか、そういった何かをやりたいという気持ちを持っている方が結構たくさんいらっしゃると思うのだが、恐らくやり方が分からないと思う。本当に簡単なこともあると思うのだが、例えば、実際にタイだったらタイの方を集めてお話をするとか、学生の方とのコミュニケーションを促進するような場を設けるとか、そういった具体的な動きをすることが、色々国際交流につながっていくと考えている。そういう支援体制があるかということと、もしその支援体制があるんだしたら、そういった学生の方に伝わる土壌があるのか、ということを知りたい。

### <浜田座長>

ありがとうございます。恐らく、そこを今回充実していこうということが、テーマになるんだと思うが、現状で何かされていることや、あるいは市として問題点というふうに考えていることはあるか。まさしくそういうことへのサポートをするための具体的なアイデアを、委員の皆様さんからいただきたいということだと思うが。

### <事務局>

先ほど事業の説明の中で、ケルンの事業において、京都で開催するイベントに学生に関わってもらう、という紹介をしたが、この件は各大学に協力をお願いして情報発信していただいた。そうすると、予想外に多くの方が手を挙げてくださって、ボランティアや国際交流をしたいという方が本当にたくさんいらっしゃるんだなと分かり、私たちも驚いた。今回はその学生の方々に自分たちでケルンやドイツの文化を紹介するような企画を考えてもらっている。

そのように、何かやりたいと思っている人をもっと巻き込んだり、そういった方に届く発信を

どうしたらいいかというのを考えていきたい。

#### <浜田座長>

その事業を通して非常に可能性を感じられた、是非それをより多くの若い人、あるいは多くの場面で広げたいということだと思う。

前田委員、何かございますか。

#### <前田委員>

そうですね。ちょっと趣旨が違うかもしれないが、私は文化芸術関係の事業をやっているもので、「Arts Aid KYOTO」という仕組みが京都市にあり、京都市が主体になってクラウドファンディングで寄付金を募るといった事業をされている。クラウドファンディングで民間から募ったお金を芸術団体に提供して、コンサート等を運営していく資金にしようという仕組みなのだが、もちろん市としてたくさん予算を持たれていると思うが、もうちょっと民間団体をうまく巻き込むような仕組みにされてはいいかなというのを、率直に思う。

本当に学生団体でもいいと思う。我々みたいな芸術団体だけではなくて、学生で主体的に取り組みたいと思っている方がたくさんいらっしゃると思うので、そういう方に予算としてある程度提供できるような体制ができると、もっともっと主体的に動けるようになるんじゃないかと。

#### <浜田座長>

ありがとうございます。クラウドファンディングすること自体が結構大変なので、そのところを行政で担っていただきたいと。

#### <前田委員>

そうですね。民間でやるとどうしても信用度が低いものですから、なかなかお金が集まりにくいというのが、恐らく問題点としてあると思う。やはり行政が主体になってやると、より信用度が増して、民間からもお金が集まりやすい体制になるかと思うので、そういった仕組みがあるといいなと考えていた。

#### <浜田座長>

ありがとうございます。

#### <林委員>

課題については、これでいいと思う。大きく捉えているので、これから各論でもう少しウエートというか、実際に実のある提言をつくっていきたいし、京都が世界文化自由都市宣言を行ったという、この理念がある京都を体現できるような提案というのが、ビビッドに出せばいいなと思っている。

国際化は、多文化共生とのボーダーが分かりにくいところもあるが、京都市の基本計画の中に領域が27政策あって、その一つが国際化。市民の実感調査をやると、なかなか高い得点にならない。つまり、国際化について、一般の市民の方の関心度が低い。この状況で、どれだけ市民の

皆さんに自分ごととして捉えてもらえるか。先ほど、市民しんぶんの話もあったが、ここが結構重要なのかと思っていて、国際化といったら国と国との関係みたいに捉えられるが、やはり人と人との関係をうまくやることではないか。今回のウクライナ避難者支援では、約4,500万円の寄付をいただいているが、だんだん関心がなくなっていく可能性がある。そうならないようにするためにも、人と人がそれぞれ理解をしていって、国際化というのが重要だというふうに、本当に腑に落ちていただくような、何かビビッドな施策を発見できないか、というのが一つ目のテーマに対して思うことだ。

二つ目の多文化共生のテーマは、これも本当に重要で、地域コミュニティにおいて、学区によっては体育祭とか防災訓練とかへの参加はあるのだが、自治会の役員レベルに、外国籍の方がおられるかというとなかなかおられない。その辺りは、言葉の壁も当然あるのだが、心の壁みたいなのがやはりまだあって、開かれていないというわけではなく、お互いにちょっと遠慮し合っているような感じがあるのかなと思っている。

もう一つ、京都市が誇っている消防団は、自分たちで自分たちを守るんだという、地域コミュニティの原点みたいなものなのだが、その消防団に原則として外国籍市民の人は入れないと聞いたことがある。公権力の行使につながるということで、これは京都市の問題ではなく、国の制度としてそうなっている。国レベルの制度について、この審議会でもやかくというような話ではないと思うのだが、現場レベルでは、色々切り分けたりして、外国籍市民の方に参加してもらえないかと試行錯誤しているようだ。これから外国籍市民と協働し合い、主体者になるための方策を考えることは、多文化共生のヒントにもなるのではないかと思う。

#### <浜田座長>

ありがとうございます。滋賀県の草津市は、留学生が消防団に入っているということで、かなり色々なところで有名になっているので、何かの工夫をしてされているんだと思う。実際に関わってもらって、実務で関わってもらおうということは、何か工夫するとできるのではないか。

実のある提案ということで、色々御意見をいただいた。ありがとうございます。

市民の方の関心をいかに高めるかということは、ずっとこの審議会でも議論をしていることなのだが、具体的に市民一般の方にこういうふうに関心を持ってもらえばみたいなことで、何かこれまで工夫されたことはあるか。

#### <林委員>

少しコロナで閉ざされた部分があったのだが、いよいよ観光客の方がたくさん来られる。観光客の方って、初めのときは金閣寺とか清水寺とかを回るだけだが、リピーターはもっといろんな人と交わりたいという欲求が高いと思う。そういうときにうまくマッチングして話をして、ファシリテータではないが、うまいこと間を取り持ってもらえる人がいれば、何か相互理解になるのではないか。国際交流会館でもそういうことをやっていきたいと思っているが、なかなかいいアイデアがまだ浮かんでいないところである。

#### <浜田座長>

ありがとうございます。浜松だったと思うのだが、外国籍市民の方が多文化共生アドバイザー

のような感じで、お客様として外国の方を呼ぶにはどうすればいいかなど、アドバイザーとして派遣されて講演する、という取組をされていると伺ったことがある。外国籍市民の方が多文化共生のプロというか、専門家として、色々教えてくださるみたいなことがとてもいいと思う。

その他、いかがか。

### <プラー委員>

外国籍住民によるアドバイザーの話の補足になるかもしれないが、日本に来て驚いたのは、市民が活動していいんだ、市民が行政に関わっていいんだということ。このような感覚というのは、やっぱりない国もあったりする。レベルは様々あると思うが、国主導で何も関われないというような国もあるかと思う。コミュニティに入っているんだという感覚がない国の方にとって、先ほどの外国籍市民アドバイザーのようなものがあるのはよいと思う。制度が国によって様々違うと思うが、そこをどうやってクリアしていけるのかというのは大きな課題であり、チャレンジでもあると思う。

### <浜田座長>

まさに、その担い手として活躍してもらうための条件整備が大事だと思う。ありがとうございます。

### <大熊委員>

何か具体的にということではないのだが、自分の中で悶々とした思いがある。

というのは、私は青少年活動センターという京都市の青少年施設に勤務している。このようなきっちりとした提言や重点政策などを見ると、「すごく充実している」と思う一方で、日々現場で動いている立場からすると、「誰かにやってもらう」というより「自分たちに何ができるんだろう」という思いで見ている。今、委員の話聞いての気づきも含めて、思いついたことを言わせていただく。

外国人への偏見やイメージみたいなものがやっぱりあるのだろうが、そういうのは、お互いに知らないからとか、しゃべったことがないから、というようなことがあり、実際にしゃべってみたら、ああ、そうなんだ、と分かることもある。

ただ、しゃべってみるにしても、何語でしゃべったらいいのか分からなかったり、自分ではなかなかしゃべれないから…と諦めてしまうことがある。そのときに、プロの通訳じゃなくてもいいので、間に入って、しゃべりたいなという気持ちをちょっと助けてくれる人がいたら…と思うときがある。例えば、地域の中には、困っている人のことを気にかけていたり、何か困りごとがあったらその人に言ったらいい、という存在として民生委員さんがおられる。色々な文化の違い等の中で、「もうちょっとこうしてほしい」というような思いを伝えるときに、その間を取り持つような“多文化版民生委員”のような方がいると、何かちょっと変わるかなと思う。

それから、地域コミュニティ活動やボランティア活動は、基本的に無償でやっているが、ある程度の報酬が出るような仕組みがあった方が、お互いに頼みやすい・頼まれやすいという風になるのではないかとも思う。

あと、施策としては、スタートアップの支援等、最先端に行く人たちを応援するものが多いが、

私たちのような日常生活に近いところにいると、生活者としての部分をどう支えるのか、に取り組みたい。すごく頑張っている、きらきら輝いている、余裕があって、問題意識も高い、などの一部の人たちだけではなくて、日本人も外国籍の市民も、あるいは一時滞在している人も含めて、毎日普通に生活している多くの人たちが、「国際交流とか多文化理解というのは意識の高い人たちがやることなんでしょう」ではなくて、「自分たちのことだ」と思えるといいなど。担い手という言葉を使うと、どうぞやってください、というイメージもあるので、何か楽しくてやっている中で、担い手というのは後から言葉として付いてくるものではないかと。楽しくてやっているとか、毎日当たり前のようにやっている人たちのことを、端から見たらそれを担い手と呼ぶんですよみたいな。最初から「担い手をつくりましょう」と言うのと、「自分にはそんな余裕ないんでどうぞよそでやってください」…となるのでは。もちろん担い手なのだが、何か特殊な意識が高い人たちがやること、できること、ではなく、楽しみながら当たり前のようにやっていることに、後から名前が付くようになると、ハードルが下がるのではないかと思う。

私たちのセンターでは、事業の枠組みとして「多文化共生」や「いろんな文化を知ろう」というフレーズを付けているが、参加する学生や若者は、その言葉で来ているのではない。「何か面白そうだな」と感じて参加し、やっているうちに面白くなって、「もうちょっと続けて来よう」…のような感じ。端から見ると担い手育成事業をやっていることになるが、来ている当の本人たちは、別に担い手になろうと思って来ているわけではなく、「楽しいから来ている」、「やってみたら大事だと思った」みたいなところがある。やってみたら気付いた、という状況をどうつくれるか、そのために自分たちには何ができるか、と考えている。楽しさとか面白さみたいなのを、前面に出せるといいのではないか。

### <林委員>

肩肘張って、いろんなことをこうですよと役所が言い出すと、逆に何か押し着せられているような感じがするので、場と機会を与えるというのが行政の役割だと思う。

だから、あまり難しいことを考えないで、百聞は一見にしかずで、海外に行ってみたら、見方も変わるということもある。今、議員さんが海外出張に行くなんて贅沢だみたいな風潮があるが、例えば少し補助金を出すなどして市民100名を抽選で選んで、海外に行ってみ聞を広めていただくのもありではないか。そういう柔らかい頭で物事を考えたらいいなと思っている。

先ほど一つキーワードで、無償でという話があったが、国際交流会館も500人以上のボランティアが完全な手弁当でやっていただいております、この方々に幾らかペイするとなると、すぐにこの存立基盤がなくなってしまう。やはりキブ・アンド・テイクというか、人間というのは、やってもらいより、やってあげるほうが元気になれるそうである。現に今もチューターは、応募者の方が募集よりも多いと聞く。これはいろんなことを分析していかなければと思うのだが、この土地の建物、立地の良さや、職員の対応の良さ等、色々な要因はあると思うが、うれしい悲鳴である。だから、便利な無償の労働とは思っておらず、ボランティアは非常に大きな財産なんだと。

一方で、例えば行政通訳等、実際にそれで生活しながら国際交流の下支えをしていただいている方の労働条件は良くない。ようやく失われた30年に対して、賃金を上げなければならない時代になってきた。国際交流を最先端で支えていただいている方が持続可能になるよう、我々としても提言していく必要がある。

### <庄委員>

非常に悩み深いというか、難しいところも多いと感じており、意見については皆さんが今までおっしゃったところに本当に賛成している。

ただ、個人レベルの担い手というところに関して見ると、意外と個人レベルでは、自分がやっていることや、見てきたこと、感じていることを発信したい、あるいは既に発信している、手がけている人というのは、数多くいると思う。その方々はきっと報酬をもらうというよりは、何となく自分が発信していることを認めてもらい、いいねと押してもらおうといったところで、ある一つの達成感を感じているんだと思う。

そういう意味で、また発信の担い手を幅広く増やすという意味においては、皆がアクセスしやすいツールを引き続き上手に活用していくことを、意識をしていくのがいいのではないかな。

ただ、そう思いつつも、やはり偏見とかヘイトとか、皆がアクセスしやすいければアクセスしやすいほど、色々な意見が出てきて、そこがカオスになってしまうということも悩みだと感じている。

もう1点は、前田委員がおっしゃったように、この取組については少し協業する幅を広げるといふか、民間企業を巻き込むといふか、同じ目線で取り組んでくれる企業等を巻き込むのがいいと思う。それに加え、学校に声を掛けたらたくさんボランティアが集まったという話もあったので、学校というキーワードをパートナーとして、いかに巻き込んでいくかということも意識されるといいと思う。

### <浜田座長>

ありがとうございます。具体的に行政だけではできない部分について、民間あるいは学校とも連携しながら進めていくという非常に大事な御提案だと思う。

その他、いかがか。

### <チースレロヴァー委員>

一つ質問なのだが、京都は大学がたくさんあり、国際化を研究しているところもたくさんあるかと思うのだが、今まで京都市と大学との協力というのはあったのか。

### <事務局>

国際交流の分野でいくと、姉妹都市交流では大学と協力して何かやっている場合が多い。

例えば、今回のケルンの件は、特にドイツ語学科のある京都外国語大学や京都産業大学等と、どのようにすれば学生が参加しやすいかというようなアイデアを伺う中で、先ほどのボランティアの企画が出てきた。大学は国際交流に関して連携しやすく、もっと広げられる可能性もあると思っている。

### <チースレロヴァー委員>

ありがとうございます。もちろん姉妹都市の交流も重要だが、例えば日本に住んでいる外国人の問題等を大学で研究している人がいると思う。京都市がそういった方と何か協力すれば、お互いにウィン・ウィンじゃないかと。知識がたくさんある学生にとっては、自分の論文が施策に生

かせる等、研究の成果が何かのためにつながれば、非常に効率が良く、予算もそんなにかげずにできるのではないかと思う。

<浜田座長>

ありがとうございます。おそらくまちづくりの領域だと、区役所と大学が連携しているような例がたくさんあるのではと思う。それを国際交流・多文化共生にも是非広げてはと。

リュウ委員、いかがか。

<リュウ委員>

私は、団体を通じるよりも、外国籍市民個人とのつながりを直接強くすることが重要だと思う。例えば、外国籍市民が直接京都市の様々な活動に参加できるように、波及性を促進することができる団体や人材を育成することが重要だと思う。

<浜田座長>

直接というのは、例えば外国籍市民とそれ以外の市民が直接関わるようなことか。

<リュウ委員>

はい。例えば、留学生が大学を通じて、京都市の学生の国際的なイベントを知り、直接イベントや活動に参加するような流れをつくれるなら、今後も担い手が継続していくと思う。

<浜田座長>

学生の一人一人にそういうふうに情報が届くようにしたらと。

<リュウ委員>

はい。団体を通じず、一人一人の発信力を生かして、直接情報を受け取ることができると思う。

<浜田座長>

ありがとうございます。発信もこれまでも何回も問題になってきたのだが、外国籍市民の方に届けるというだけではなく、それを担ってくれそうな方々の下にも、うまく情報が届くように色々な工夫をしていく必要があると。

<孫委員>

ネット等の研究をされている方の発表を聞いて思ったのだが、例えば検索するときに「韓国」と入れたときに、ヘイトに関わるワードがばあっと出てくる。それが共起ワードだというふうに研究されている方がいるのだが、そういうふうにならないようにしたらいいのではないかと、素人的には思った。自分がアクセスしたら、そのワードがばあっと出てくるような状況というのはどういうふうにしたらネットの世界でコントロールできるのか、専門外なので全く分からないのだが、平和とか交流に関わるものが上がってきたらいいのだが。そうすれば、そのカオスの状況にならないと思う。そういった検索のコントロールってどうやったらできるのかと。専門家の方

から御意見いただいて、何か発信することができないのかと最近ずっと思っている。ヘイトの問題でもそうだが、そういった言葉に感化されてしまうのは、残念だなと。このネットの環境をどうしたらいいかというのは、最近困っている。提言には何か入れられたらとは思っているのだが。

#### <庄委員>

残念ながら、多くの人がある検索を見たいからネットにアクセスしている、というのが事実なんだと思う。みんなが検索しているワードや見たいものがやっぱり上位に上がってきていると。

#### <浜田座長>

しかも1回検索すると、もうその関連情報がどんどんお勧めされてくるので、すごく難しい。

#### <プラール委員>

同じような気持ちを持ってくださる方もたくさんおられると思うし、いい情報発信をしたい人もおられると思うので、こういうことに長けている専門家の人を巻き込んだ、有志のプロジェクトチームを募って、そこに学生を巻き込んで、市民も巻き込んで、それこそ、ボランティアと言いたくないのだが、クラウドファンディングでチームみたいなのをつくって、1年でも2年でも活動して発信していくということをやるのも。それこそ交通費程度の支払いはしなくてははいけないかもしれないが、多言語で発信していったって、もちろん専門家の方にも入ってもらって、SEO（Search Engine Optimization、検索エンジン最適化）で変なワードが出てこないようにするか、色々工夫はできると思うので、そういうのをやるのも面白いかもしれない。

#### <浜田座長>

ありがとうございます。

完全に止めることはできないにしても、何か新しいものを発信するということは是非できればと思っている。

色々御意見を頂戴したが、基本的に担い手という言葉を使うかどうかは別として、これからの国際交流・多文化共生に関わってくれる人たちをどうやって増やしたらいいかという提言をしていくということについては、皆様に御賛同いただけたものと考えさせていただく。

一旦、今日、様々お出しいただいた意見を事務局でもう一度調整いただき、またテーマとして練り上げて、今後の議論に生かしていただきたいと思います。皆さん、よろしいでしょうか。

それでは、色々な御意見が出たので、特に取りまとめはしない方がいいかと思う。そのほか、議題1、議題2と審議をしてきたが、御意見等はないか。あるいは御質問等はないか。

それでは、本日の議事はこれで終了とする。進行を事務局にお戻りする。

### 3 閉会

#### <事務局>

本日は、主に議題2を中心として様々な御意見をいただき、本当にありがとうございました。以上をもって、今年度の第1回の審議会を終了させていただく。

(了)